

Title	日本書紀にみえる外国地名の分布：その数値的考察
Sub Title	The distribution and the frequency of the foreign place-names in Nihon shoki (the Chronicles of Japan)
Author	井口, 悦男(Iguchi, Etsuo)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	1980
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.12 (1980. 12) ,p.97- 112
JaLC DOI	10.14991/005.00000012-0097
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000012-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本書紀にみえる外国地名の分布

——その数値的考察——

井 口 悦 男

要 旨

古代貴族の世界への関心の所在は、奈良朝初期にあっては、日本書紀に含まれる外国地名の、その分布状況からすると、圧倒的に半島に、なかでも南半部に集中していたということになる。

- 1 はじめに
- 2 書紀の外国地名分布状況
- 3 外国地名の分布からみた特色
- 4 外国地名の表記からみた特色
- 5 書紀の国内地名分布との比較から
- 6 むすび

1 はじめに

わたくしはこれまでに、古事記、日本書紀をはじめとして、続日本紀、それに続くいわゆる六国史について、含まれる地名（国内）を拾いだし、その地名を指標として、国別分布数をかぞえ、分布の濃淡とか、また地名表記法のちがいをみつけだし、親しい呼び名で記録される地名の、分布する範囲をかぎってみたりして、古代国家をささえていた貴族の、都を中心とする生活圏の復原および変化を明らかにすることを、いささか試みてきた。^{1) 2) 3)}

今回は、これまでのばあいとりあげなかった、外国地名について、その分布をもとめてみようと思う。手はじめとして、日本書紀について、外国地名の分布をもとめ、その結果を提示するとともに、その分布状況から導きだされる、いくつかの点に触れてみようと思うのである。

考えてみれば、いまとりあげる日本書紀についても、なかに含まれる多く

の物語や記録のしめす場所は、国内にかざられることはなく、外国、とくに半島や大陸方面におよんでいる。地名の分布をとりあげるならば、当然外国の地名分布についても、配慮したうえでなければ、地名分布を通しての日本書紀分析は、完全なものとはいえない。この意味でも、これまではたしてなかった部分におよぶことで、地名分布からの考察を深めたいと考える。そしてここで、少なくとも日本書紀に含まれる地名の分布数については、いちおう全体にわたる数値を明らかにすることができたことになる。

ただ、国内の地名分布を考えたおりに、その分布数の濃淡の範囲からとめた、貴族の生活圏の復元という方向とは、いささか異なるものを、外国地名の分布から得られるものには、考えなくてはならないと思う。それは、基本的には両者のばあいの共通項といえる、古代貴族の地理的あるいは政治的関心事の範囲をしめす、その指標というようにみられるということである。

奈良朝初期、日本書紀の編集段階で、そのときまで、なんらかの現実的意味をもちつづけた祖先功業物語や、過去の史実をふまえた記録とかに、祖先の名とともに、どれだけの地名あるいはそれに類するものが含まれ、ある地域について、くりかえし語られていたかが、地名分布数をもとめてみることによって、より明らかになってくるわけである。そして、ある場所に結びついた記事から、当時の貴族たちの、地域的な関心の広がりや範囲を明らかにできるとともに、地名分布数の地域的な濃淡も、自然明らかになってくるといえよう。

古代貴族は、外国について、いったいどの範囲の地域に深い関心をいだいていたと、日本書紀はさししめすのだろうか。もちろん書紀の記事を一通りみわたせば、そのおよその見当はつけられるといえよう。わたしは、日本書紀全体を通して、数値的にとりあげ、確実な形でこの点を表現してみようと思うのである。

2 書紀の外国地名分布状況

日本書紀について、国内の地名分布をもとめたばあいと、同じ基準で、外

国地名の分布をまとめてみると、つぎの表1(100ページ)にしめすようである。ここでまた地名件数のかぞえかたをくりかえすのは、繁雑になると思うので、くわしくは、すでに説明したものに譲るとして、4)いま便宜上ごく簡単にしめすと、つぎのようである。そのはじめに、おことわりしておくことは、書紀の文中に出てくる地名にあたるものを、ひとつひとつ機械的にかぞえるという方法ではないことである。ひとつの記事を一応の単位として考えたうえで、記事全体をみわたして記事のなかに、いくつの場所がしめされているかを、みきわめて地名件数のかぞえる方法をとっている。たとえば推古紀31年の条に「是歳、新羅伐任那。任那附新羅。」とあるばあい、これを機械的にとらえるとすれば、新羅が2、任那が同様に2となろう。これをそのようにかぞえず、この記事で場所としてとりあげられているのは、新羅と任那であるから、おのおの1件というように拾う。さらに例を続けさせていたけば、いまの推古紀は「於是、天皇將討新羅。謀及大臣、詢于群卿。」と続き、新羅征討のことが、ただちに朝廷で問題になる場面になる。そして群臣の意見がとりかわされ、このさい任那を新羅からとりかえし、さらに百済に附属させたほうがよいとする意見とか、その反論がでたりして、結局「爰遣吉士磐金於新羅、遣吉士倉下於任那、令問任那之事。」と、近ごろの任那問題について、新羅と任那に使者が送られることにきまったと、みえる。ところでこういうばあいの地名のかぞえかたであるが、ここでは、途中の宮廷内の意見のところにでてくる国々は省いて、結果として新羅、任那への遣使のところを各1件として、かぞえるようにするというぐあいである。5)

また、地名としてとりあげるものは、たとえば「谷那鉄山」(神功紀52年9月条)「己汝之地」(継体紀7年6月条)「漢城」「平壤」(欽明紀12年 是歳条)「百濟州柔城」(天智紀2年9月丁巳条)というように、具体的な細かい地名にあたるものだけに止めず、さらに広い地域名あるいは国名にあたるものを含める。「加羅」「安羅」「卓淳」「耽羅」そして「任那」「高麗」「大唐」なども、それぞれ地名をあらわすものと扱う。ただし、すでに国内地名の分布をとりあげたときに、そのほうに含めてかぞえてしまった地域の「蝦夷」「肅慎」とか、「多櫛」「掖久」「海見」など、東北以北方面

表1 日本書紀の巻別外国地名分布数

() の数値は そのうち細かい地名の分布数

地 域		半 島						中 国	その他
巻	総 数	高 麗	新 羅	百 濟	任 那	その他	全 体		
1 神代上	4 (2)		1?(1)	1?(1)			2		
2 神代下	0								
3 神 武	0								
4 綏～開*	0								
5 崇 神	2		1		1				
6 垂 仁	11		6		4				1
7 景／成*	0								
8 仲 哀	2		2						
9 神 功	58(27)	1	14(2)	20(4)	19(18)	1(1)	1	2(2)	
10 応 神	31(10)	3	5	17(7)	5(3)			1	
11 仁 德	10	2	3	2			2	1	
12 履／反*	0								
13 允／康*	3		3						
14 雄 略	33(4)	3	7(2)	11	4(2)		2	6	
15 清～賢*	8(3)	2		3(3)	1		1		1
16 武 烈	2			2					
17 經 体	118(68)	4	20(6)	23	70(61)	1(1)	1		
18 閑／宣*	5		1	2	1		1		
19 欽 明	207(89)	21(6)	21(3)	58(5)	101(75)		3	1	2
20 敏 達	24(4)	3	8	6	7(4)				
21 用／崇*	7		1	5	1				
22 推 古	67(6)	8	19	12	17(6)			10	1
23 舒 明	15	1	4	5	1			4	
24 皇 極	14	3	3	6	1				1
25 孝 德	38(2)	4	15	6	3		1	7(2)	2
26 斉 明	69(22)	6	10	22(8)		2(2)		24(12)	5
27 天 智	79(25)	14(1)	15(3)	34(17)		4(4)		11	1
28 天武上	3	1	2						
29 天武下	49(6)	13	24	4		6(6)		2	
30 持 統	37	3	22	5		2(2)		4	1
書 紀 全 体	896 (251)	92 (7)	207 (17)	244 (45)	236 (169)	16 (16)	14	73 (16)	15

*はそれぞれ綏靖～開化、景行・成務、履中・反正、允恭・安康、清寧～仁賢、安閑・宣化、用明・崇俊の各紀を意味する。

とか薩南諸島以南方面は、今回対象外とした。したがって、済州島（耽羅）を含む半島から大陸方面、それ以遠の地域ということになる。⁶⁾

さて表1では、便宜上、日本書紀の巻別に数値をまとめてしめた。なお地名分布の多い半島地域については、細かい区分を設けてしめた。書紀の記載にしたがって、「高麗」「新羅」「百済」「任那」というようにしてみた。区分基準としては、それぞれの国の領域に変動があって、正確なものとはいえない点は気になるが、一応の目安になると思ったので、このような区分法をとってみた。それに日本書紀にみえる外国関係の記事の多くは、「新羅遣使……」「百済国遣使……」「高麗使人……」「耽羅遣王子……」というような定形が多く、ひとつの記事は国名あるいはそれに近いものをしめすだけで終って、それ以上にその外国国内の行動をしめす地名をあげる例が少い。したがって、多少流動的な区分基準をとっても、関心の所在の区分としては十分意味をもっていると考えたからである。一方少いが具体的な細かい地名のばあいの配分は、先学たちの苦心の比定の結果を参考にしながら、書紀のそれぞれの記事のいわんとするところを、よくみつめて、その流れのほうに中心をおいて、それぞれの場所にふりわけることにした。⁷⁾

以上の操作をふみながら、ここに拾いだされてきた外国地名の分布の様子を眺めてみるとどうだろうか。表1を一覧して、明らかなことは、その分布のほとんどが半島地域にかぎられていることであろう。大陸方面、中国に対する数値は、半島のそれにくらべると、ずっと少くなっているし、さらに遠方地域のことになると、微々たる数である。「扶南」「吐火羅」「舍衛」「崑崙」「突厥」「天竺」そして「爾加委」とあげられるにすぎない。⁸⁾ それは、日本のおかれた地理的位置の自然によくしたがっているといったらいいいのか、よく反映していると評したらよいのか、それにしてもおどろくばかりである。

3 外国地名の表記からみた特色

このような外国地名の分布をまえにして、どのようなことが考えられてく

るのであろうか。そこで、まず考えられてくることはなんといっても、中国を中心とする東アジア文化圏にあったとみられる古代日本の、その貴族たちの当時の国際的最大の関心事が、日本書紀のしめすところによると、北九州から海峡ひとつへだてた隣国、半島地域にあったことをしめすにほかならないということではなかろうか。奈良朝初期の貴族たちの心をとらえていた、今日でいう外国は、第一に、すぐ隣りにある国々のことであった。それは中国に対するものより、たいへん強いものであったとみられるのである。

もう少し、出てきた地名分布のありかたによりながら、この点を考えてみよう。分布のありかたで、まず気づかなければいけないことは、半島関係の地名分布が、書紀の巻々の多くに分散分布している点であろう。とくにある巻にかぎっていないところである。もちろん数値の分布に濃淡はあって、神功皇后の物語をはじめとして、任那地域の先行が問題となるおりとか、百済と新羅の交戦時とか、唐、新羅による百済の滅亡とか、半島方面の動きが急を告げるときに、その多くを半島にさく巻が、間にふくまれることは確かであり、その一方、まったく半島関係の記事をのせない巻も、ごく古いところにみられることもいえるが、日本書紀巻全体の流れとして、半島のことは多かれ少なかれ、書紀が触れようとしていることは、対中国関係とくらべて、大いに注目すべき点と思うのである。わたくしは、それぞれの巻にのべられた半島関係の記事が、そのときどきの事実によるとは考えないし、それらが古いところでは多分に遡上し、また本来ひとつの物語であったものが、分散登場したり、あるいは意識的に記事がさしはさまれたりしているものもあると思う。記事のひとつひとつが事実かどうか考えて、地名分布もかぞえる立場ではなく、広く各巻々に分散し、またある巻にその山場を設けるように記述されている、日本書紀をつくりあげた古代貴族たちの、くりかえしのべようとする半島地域に対する、この関心のありかたに、そのなみなみならぬ執念というべきものを、とりあげてきた地名分布の数値から、読みとれることが主張できないかと思うのである。

いま半島関係の地名分布総数は、概数で800の多くとなる。これは古代貴族のこの方面に対する、関心の度合の深さをしめす数値と考える。というの

は、書紀の国内地名分布総数が、概数で1800となるのにくらべ、(表2 108ページ参照) じつに半数にせまる数にあたる。この重みは、われわれが日本書紀を考えるばあいにも、あるいは当時の貴族の心のありかたを思うばあいにも、十分知っておいてよいのではなからうか。そして表1の、細かい区分の半島の部分を合算してみると明らかなように、全体で900に近い外国地名分布のうち、やく800が、すなわちその9割は半島のところにあたっている。残りのうち1割弱が、中国との交渉にともなう地名数であるにすぎない。ということは、日本書紀の主張するところは明白というほかなからう。たとえ書紀に、古くは「呉」、新しくは「隋」そして「大唐」と、中国との往復をしめす記事があって、大国との交渉に深い配慮のはらわれたことが認められても、いま出てきた数値上の圧倒的な差は、日本と半島との、結びつきの濃さに、それはくらぶべくもないことをしめしている。そして、なかでも半島南半部に対する関心が一番高かったことをあらわしているとしたか考えられない。百済(244) 任那(236) 新羅(207)の数値に対して 高麗(92)が半分以下と、ほかとの大きな差が出ている。書紀編集時に一番近い半世紀ほどまえの、隣国での大事件は、まだ奈良期初期の貴族たちの心に、大きな影をおとしていたにちがいない。斉明朝から天智朝にかけての、百済の興亡をかけたの戦いで、その決戦に日本は、唐の水軍に大敗を喫したが、その「大唐」に対する対抗的関心が持続していたとみられる。にもかかわらず貴族たちの最大の関心は、新羅によって統一されてしまった半島の海峡側地域に、持続されていたと、この数値は、物語っているのではあるまいか。中国側の史書には、日本が古くから中国との交渉をもったと記録しているが、書紀にはこれに対応するものは、その片鱗がうかがわれるにすぎない程度で、くわしく「卑弥呼」や「倭の五王」を物語ろうとしていない。そのため相対的に中国の数値が低下してしまう傾向が強くなっているのかもしれない。しかし、今日中国側史書にのせられた、倭国の遣使交渉の過程の多くは、倭国の対半島関係の、優位展開を期待してのこととみられている。とすれば、この時期までの古代貴族たちの国際的主張というか関心は、一に半島南半部にあったとみてよからう。

4 外国地名の分布からみた特色

すでにこれまでに、地名の実例があげられてきたところから、気づかれていますと思われるが、国内に関する記事で地名が出てくるばあいと、その地名のさししめす範囲がだいぶちがってきているのである。表1のそれぞれの欄に（ ）でしめした数値は、細かい具体的地名あるいはそれに近い内容のものをしめすが、それぞれの地域における、その分布数の様子をみると、たいへん限られていることがわかつた。外国地名の多くは、「高麗」「新羅」「百濟」「任那」と、国名あるいは、それに類する大きな地域名をあらわす名称どまりで、多くの記事が終ってしまつて、それ以上に、くわしくおよぶものが少いことをあらわす。ここに書紀の外国地名についての、ひとつの特色が認められる。

この点をさらにはっきりさせるために、いま書紀の国内地名のばあいの例でしめせば、「乙酉、摂津国貢白巫烏。」（天武紀9年3月条）「是月、灰零於信濃国。草木皆枯焉。」（同14年3月条）のように、やや広い地域をさす地名だけで、ひとつの記事が終つてしまい、そのなかにもう少し細かい場所の表示のないものもみられるが、一般には、たとえば「辛卯、相模国司、献赤烏鵠二隻。言、獲於御浦郡。」（持統紀6年5月条）「日羅等行到吉備国児島屯倉。」（敏達紀12年5月条）「給近江国坂田郡水田廿町。」（推古紀14年5月条）のように、大きな地名に終らず、やや細かい地名におよんでいるのが普通である。

このような地名についての、くわしさのちがいが外国のばあい、また半島の南半部についても、書紀の記載からいえるのである。ただそのなかになつて、（ ）の数値の比較からすると、「任那」の地域だけがやや例外といえそうである。この地域内に、細かい地名数全体のやく7割が集中分布していることは見逃せない。これと対比するかのように、任那周辺の三国についてはその分布数が、ぐっと低下している。（以上表1最下段を参照）三国のそれぞれに段階が認められて、興味深いのが、少い具体的地名は、いずれも、交戦

時の城の名称を中心とするものにすぎない。このように「任那」が半島の地名分布としてみて、ややくわしくなっているのは、半島南半部地域内でも、細かい地域名が比較的問題にされるほど、ほかの国々とはやはりなにかちがった場所であることをしめす、数値のちがいと認めてよいと思う。書紀ではここを「内官家」の国と、くりかえし主張しているが、日本からみて、半島のほかの地域にくらべ、どうしても近しさを感じさせる、数値の高さといえよう。

つぎに、細かい具体的地名の表記法から、外国地名にみられる特色をのべてみよう。孝徳紀の伊吉連博徳書から引用した部分に、遣唐使の行路がしめされ、「越州会稽県須岸山」とか「余姚県」（大化5年7月条）と、日本の国内のばあいと同様な位置関係をはっきり表現した地名例は、ぎわめてまれな例であって、そのほとんどは、その名称をただ記載するだけである。それはたとえば、「是歳、紀生磐宿称、……築帯山城、距守東道。」（顕宗紀3年条）の「帯山城」のように、また「上臣抄掠四村、金官・背伐・安多・委陀、是為四村。一本云、多々羅・須那羅・和多・費智為四村也。」（継体紀23年4月是月条）の四村にみられるように、また「大唐軍将、率戦船一百七十艘、陣烈於白村江。」（天智紀2年8月戊戌条）の「白村江」にみられるように、たんにその名称だけに終わっているのがほとんどである。「久麻那利者、任那国下哆呼唎県之別邑也。」（雄略紀21年3月条）とか「自熊川、入任那己叱己利城。」（継体紀23年4月是月条）のように、註記のくわえられた例はごく少い。

このような表記法のしめす意味は、その名称だけが伝えられるに終って、それ以上に位置関係まで明らかにしていないことであり、疎遠の地の地名をその記述がしめしていると思うのである。その一方わたくしは、国外の地名をあらわす方法として、このような地名をポツンとさしこむような表記法は、ごく自然なあらわしかたであったとも思う。というのは、たとえば国内記事では、その内容を豊かにするものとして、登場人物の名前とともに地名のくわしさが効果をもつ。その背景には人物名と地名に対する、おたがいの間に共通する知識の存在が考えられるからである。しかしそれが外国のばあいどうであろうか。そこにくわしさに対応する地名の知識、あるいは共感を呼び

おこすものを、もちにくいといえよう。したがって、他国との交渉の記事では、通常その国名にあたるような、大きな地域名をあらわすことで十分たりていたと思われる。このような大きな地域名の分布数が多くなっている理由は、地名のくわしさに対する、国の内外での興味というか共感のちがいにものとづくことが根本にあるように思えてならないし、書紀の表記法にもそれが反映していると考えられる。そして、外国での日本が関係する異例をのべる記事に、事の推移の説明として、はじめて、いくつかの断片的といえるような細かい地名が登場してくるが、これも長い伝承にとどめられる最少限度の地名であったといってよかろう。もちろんその事件の要点をのべる地名であったにちがいない。しかし、国内のような知識の基盤の共通性は考えられないため、その名称がようやく伝えられる程度であったと思う。しかもその一部分とか類似名にすぎなかったこともあるだろうし、そのうえ後世の音とか文字の移動も考慮されてよかろう。他国の古代地名をいま比定する困難さを教えられるにつけても、記事の内容として、地名に対する要求度に大きなちがいのあったことを、わたくしは考えてしまうのである。⁷⁾

結局、書紀の外国地名としては、少数の例外は別として、その多くは大きな地域名というべき国名、あるいはそれに類するものであらわされるのが普通で、細かい具体的な場所の名をあげる機会には、比較的少く、しかもそのばあいでも、その名称だけがようやく、他国の人名と同様の状態で伝わるだけで、その位置関係の表明におよばない、不明に近い状態で記載されたとみられる。それだけ遠隔地のことであり、位置不明でも記事として一向に支障はなかったのである。

このように地名の表記法を眺めてくると、書紀の編者たちは、おそらく意識していなかったと思うが、今日からみて、ごく自然に地名を扱って、それぞれの場所の記事をまとめていたといえる。それは、大和国など都に近い国の地名が記事になるときは、国、郡名など位置関係をあらわすものは通常まったく省かれた、略称でいきなりしめされる。「辛丑、作須弥山像於飛鳥寺西。」(斉明紀3年7月条)「甲寅、祭広瀬竜田神。」(天武紀9年4月条)「丁卯、天皇狩于倉梯。」(同紀12年10月条)「秋九月、始立茨田屯倉。冬十

月，造和珥池。是月，築横野堤。」（仁徳紀13年条）とあるように，その記述のなかに，いかにも話題の主である貴族たちの，おたがいに何も註記不要で，ただちに通じあうある地域内の，親しい場所に対する地名の呼び名を，思わずそのまま記録してしまったことを感じさせる。いわば当時の貴族たちのホームグラウンド内にあることをしめすといえよう。つづくその外側の地域となると，記事には国，郡名がはいってくる。「送置于尾張国熱田社。」（天武紀朱鳥元年6月乙亥条）「癸卯，奉幣於居紀伊国々懸神。」（同7月条）「醴泉涌於近江国益須郡都賀山。」（持統紀8年3月己亥条）の例にみられるように，位置関係を明確に表現しようとしていることがわかる。それが正式の称呼であり，また，場所の区別上ということも考えられるように，そこには畿内の地名のように，人々にそのものだけでは通じなかった場所名であることもしめしている。地名に説明が必要な地域であると同時に，また一方註記をつければ，人々にわかる範囲でもあったことを物語る。さらにその外側ともなるとどうだろうか。それは，いまのべてきたようである。以上，都を中心に，三段階の地域の存在が，地名の表記法のちがいがら浮かびあがってくるのである。すなわち畿内周辺の，まったく位置関係をあらわさない地名表記の地域。これは貴族たちの日常行動半径内をしめす。貴族の生活圏をさししめす。そのまわりをとりかこむようにあるのが，国，郡など位置関係をつけてあらかず地域。貴族たちにとって，地名の位置関係がわかる範囲をあらわす。とりもおさず，支配範囲を表明している。さらにその外側は，外国あるいはそれに近い地域であるが，ここともなると，大きな地域名で記述されるのが普通で，細かい地名がたまたま出てきても，それは大きな地域のどこかという程度にしか明らかでない，いわば位置不明の地名にすぎない。日本書紀という，古代の国家正史といわれるもののなかにも，現代に通ずる人間性の一面を見出すことができるといえよう。

5 書紀の国内地名分布との比較から

ここで，書紀全体の地名分布から，その外国地名分布を眺めてみよう。表

表 2 日本書紀巻別国内地名分布数と外国地名分布数の対比

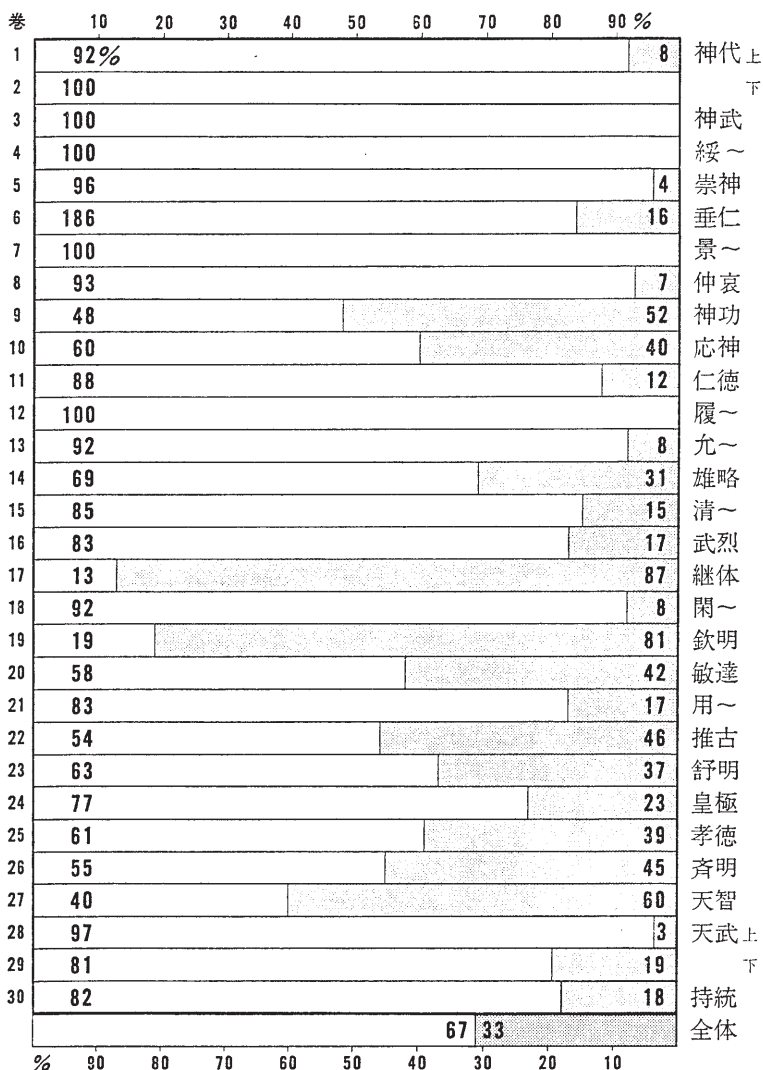
巻	実 数		百分比	巻	実 数		百 分 比
	国内	外国			国内	外国	
1 神代上	49	4	92／8	16 武 烈	10	2	83／17
2 下	23	0	100／0	17 継 体	18	118	13／87
3 神 武	76	0	100／0	18 閑／宣	59	5	92／8
4 綏～開	34	0	100／0	19 欽 明	48	207	19／81
5 崇 神	44	2	96／4	20 敏 達	33	24	58／42
6 垂 仁	58	11	86／16	21 用／崇	34	7	83／17
7 景／成	125	0	100／0	22 推 古	79	67	54／46
8 仲 哀	26	2	93／7	23 舒 明	26	15	63／37
9 神 功	54	58	48／52	24 皇 極	47	14	77／23
10 応 神	46	31	60／40	25 孝 德	59	38	61／39
11 仁 德	70	10	88／12	26 斉 明	84	69	55／45
12 履／反	31	0	100／0	27 天 智	53	79	40／60
13 允／康	34	3	92／8	28 天武上	115	3	97／3
14 雄 略	75	33	69／31	29 下	210	49	81／19
15 清～賢	44	8	85／15	30 持 統	172	37	82／18
全 体					1836	896	67／33

2として、国内地名分布数と外国地名分布数の対比をしめした。表1のばあいと同様にして、巻別で、その実数および互いのしめる割合を順にあらわした。また百分比の部分だけべつに図であらわしてみた。(109ページ)

この表から、まず注目されることは、国内、外国、それぞれの地名分布数の、全体としての比較であろう。すでに3項のところで、触れてきたところであるが、数値的に7割弱が国内地名で、3割強が外国となっている点である。これは、国内の地名分布数のほぼ半分に近い数値が、外国にあてられているという事実である。当時の貴族たちの関心の度合いが、国内の数値にくらべて、外国に対してもたいへん高かったことをあらわすと思う。しかも限定された、半島南半部に、集中分布していることは、ことさらに注目してよいと考えるのである。島国日本という地理的環境は、いまもむかしも変らぬところであるが、書紀当時、まだ国家建設段階にあった貴族たちは、国内だけに目を向けることなく、隣国、一番近い隣国に高い関心をもっていたとみ

国内地名数→ ←外国地名数

国内地名数→ ←外国地名数



てよい。ちなみに、地名分布数の最高値は「大和国」(668)であり、それに続くのは畿内のどこかでなく、外国にあたる「百済」(244)「任那」(668)「新羅」(207)である。そして以上をまとめた数値は、書紀の地名分布総数の半数に達することでも、貴族たちの注目する範囲が、そこにしめされてい

るといって過言でなかろう。そして、大和と半島の中継点とみられる「筑紫」「摂津」の数値が、それぞれ(149)(134)とこれらに続く値であることは、国家間交渉、すなわち日本の大和と半島南部諸国との間に、当時の重点があったことを物語るにほかならないといえよう。そういう性格を、一面で日本書紀が、よくあらわしていることを明らかにするとしてよいと思う。

つぎに注意されるのは、各巻ごとにしめした、国内地名数対外国地名数の比率のしめす点であろう。これを通じて、各巻々の記述の地域的重点の所在をうかがうことができるとともに、その記事内容の地域別特色を、数値的にしめしているといえる。この点を知るには実数でくらべてもよいが、その割合であらわしたほうが理解しやすい。(図参照) 書紀最後の2巻は続日本紀につながる、陳述史料としての形をととのえている。そこでは国内地名と外国地名の比は、およそ8:2となり、記事の重点が、大きく国内側にあることが読みとれる。しかしそのまえの天武紀上では、これが10:0に近くなって、ほとんど国内記事でしめられていることをしめす。これは「壬申の乱」の経過をのべる特殊の巻であるため、その後の巻とは内容を大きく異にすることによる。このような見方が許されるならば、ここにあらわされた数値から、「神功紀」「継体紀」「欽明紀」「敏達紀」「斉明紀」「天智紀」に、外国地名分布の高まりから、その異常性を読みとれることになろう。とくに、「継体紀」「欽明紀」の特殊性が浮かびあがる。このばあいと逆で、国内記事ばかりで、やはり内容的に特殊とみられる巻々の検出もすぐできるといえよう。また、「継体紀」から「天智紀」にいたる、外国地名のしめる割合の連続的に近い高い比率の続くところに、古代国家と半島との関連の深さ、緊張度の持続をあらわす証左としてよからう。(図参照)

以上のように、国の内外の地名分布の数値をあげることで、日本書紀各巻の性格の一面を、一覽的にあらわすことができたといえよう。

6 むすび

日本書紀のなかで、記事として人名ほどこれまで注目されることなく、そ

の説明上、ごく自然に記入されたにちがいないのが、地名と思われる。その地名を指標として、どのような範囲に分布し、その濃淡の様子を追いかけてみると、古代国家の全域におよぶとともに、大和から畿内各国およびその周辺に濃厚に分布し、さらにそれは、筑紫から海を越えた、半島南半部に達する。この事実から、日本書紀にのべられた最大関心をよぶ外国は、中国ではなくて、半島南半部の国々の地域に認められるとってよい。それも各地の外国に興味をしめしたなかで、半島南半部にとくに関心があったというのではなくて、日本の大和周辺に続く関心の所在地は、半島南半部にあったとしてよい。これを書紀にしめされた古代貴族の国際性とするならば、それは広い国際性というより、たいへん限定された、集中的なそれと評したらいいのだろうか。

註

- 1) 井口：記紀にみえる地名の分布からみた古代貴族の生活圏について、史学，36，2～3，193～212. (1963)
- 2) 井口：奈良朝貴族の生活圏——続日本紀にみえる地名の分布からみた考察——史学，43，1～2，121～142. (1970)
- 3) 井口：9世紀初頭の貴族の生活圏——日本後紀にみえる地名の分布からみた考察——慶應義塾大学言語文化研究所紀要 4. (1972)
- 4) 上掲註2) のp.122～127を参照していただければ幸いである。
- 5) 地名としてとりあげるのは、たとえば「百済から使がきた」とか「新羅が任那に侵入した」というように、具体的なある場所からの移動、あるいはある場所への行動をとまう内容を意味するばあいにとりあげる。宮廷内の意見とか計画のばあいで、具体的な行動をとまわないものは省略する。また、「百済から僧がやってきた」というのは、百済の1件としてかぞえる。しかし、一度すでに日本に渡来していた「百済人を甲斐の国に移した」というときは、たとえ「百済」とあっても、このばあい日本の国内での移動であって、もう外国地名の百済とは結びつかない例であるから、これはかぞえない。
- 6) 参考までに、東北以北および薩南諸島方面の数値をあげれば、蝦夷11，肅慎3，津刈4，淳代4，齧田1，渡島2計25，多嶺6，掖久5，海見2の計13である。
- 7) おもに日本古典文学大系，日本書紀，上下，岩波書店（1967，65）によった。なお，末松保和：任那興亡史，吉川弘文館（1949，1956再）池内 宏：日本上代史の研究，近藤書店（1947）鮎貝房之進：雑攷 日本書紀朝鮮地名攷，国書刊行会（1937，1971再）を参考にした。
- 8) 扶南（欽明紀4年9月条）

吐火羅 舍衛（孝徳紀白雉5年4月条）

崑崙（皇極紀元年2月条）

突厥（天智即位前紀7月是月条）

天竺（欽明紀13年10月条）

爾加委（斉明紀5年7月条）

中国より遠方では、以上の地域の名称がみられるが、書紀の記事で実際に日本と結びつくのは、日向に漂着した「吐火羅男二人，女二人，舍衛女二人」であり，また遣唐使が漂流した「南海之嶋々名爾加委」と，そして百済経由でもたらされた，「扶南財物与奴二口」ぐらいである。